
夕闇の中 生きながらえる

珀志水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕闇の中 生きながらえる

【Nコード】

N2477P

【作者名】

珀志水

【あらすじ】

彼女が見たものが何かは誰も知らない。生きるために忘れて行く子供と、そんな子供を真綿に包むように抱きしめる青年と、そんな彼らを見守る大人の、ひどく不器用で、優しい、家族の絆の話。「書いては書きなおしてを繰り返しているので更新ひどく遅いです」

0・始まりは緩やかに

生きているのに、死んでいるかのようだ。

まるで別次元の生き物のように、僕はそこにいた。

行き交う人々。色づくことのない灰色の雑踏をしり目に、密やかに息をする。誰にも気づかれないうちに。誰にも見咎められないように。密やかに、密やかに。

凍えるような寒さの中、冬物の制服にマフラーを巻いただけの姿で、僕は立ち尽くす。動くこともできず、けれど、蹲ることもできずに。

そんな僕にさらなる追い討ちをかけるように、空からこぼれた雫が、叩きつけるように僕を濡らしていく。悴んでいた指は感覚をなくし、小刻みに震えている。噛み合っていない歯の根が、力チ力チと音を立て、水分を吸った衣類に体温を奪われているのだと知った。殊更、足は地に張り付いたように動かなかった。

「なにしてんだ、そんなところで」

叩きつける雨が不意に止んで、数時間前に聞いたはずの、懐かしい声が鼓膜を叩いた。

顔を上げた先に見つけたその人は、呆れたように肩を竦めて。

「ミカゲ、さん？」

涙、なのだろうか。それとも雨？自らの頬を伝う雫がなんなのかもわからずに、ただどうしようもない安堵感を覚え、震える手を伸ばす。その手を暖かい大きな手が包み込んだ。

「こんなに冷えて、風邪引くぞ。帰って温まらないと」

いつものように笑う。困ったような苦笑い。苦笑い。…笑み。

何か、別のものに繋がりそうなのに、長時間雨に打たれたせいなのか、熱に浮かされたように思考に霞がかかる。

取られた手をひかれ歩き出す中で、その背が、俄かに何かとダブった。

「みかげ、さん…」

黒い、黒い何か。影のような闇が、ずるりと這うように繋がれた手へと伸びてくる。それに吞まれるかのような錯覚を起こし、勢いよく手を振り払って、後退る。バシャバシャと水が跳ね、纏れる足に、靴の中まで濡れているなど、恐怖に震える思考とは別のところ で思った。

「おい…？」

困惑したような表情を向けられ、弁解しなくてはと思う反面、恐怖に身が竦む。

違うのに。彼じゃないのに。この人じゃないのに。

この人が私を傷つけるなんてことは、ありえないのに。それはわかっていてのに、身体は心を裏切って、思うように動かない。動け動けと念じれば念じるほど、身は竦み、震え、力が抜ける。

尻もちをつくように音を立てて座り込んで、息苦しくなった呼吸に喘ぐ。

「おい…　っ！」

傘を取り落とし、僕を抱き上げる彼は、必死に何か呼びかけていたけれど、耳鳴りの高い音に掻き消された。

苦しくて、苦しくて、苦しくて。でも、抱きしめられている腕の温度に、安堵して。苦しいのに、幸せだなんて、なんだか変態みいだ。

先ほど恐怖したはずなのに、絶対的な安心感を覚えているのも、考えてみれば不思議で。

「　　！　　！」

閉じたま蓋の裏。呼ばれている、だから応えないといけない。そう思うのに、もう、指一本動かさそうになかった。

ああ、そもそも。それは、僕の名前なのか。本当に？本当に？だって、だって…。

僕は、だれ…？

名前すら思い出せない。僕は何なのだろう。思い返してみれば、

覚えていることも極僅かで。それさえ、自己の確立には至らない。

沈んでいく思考という闇の中で、僕は自問する。自答できず、ただ沈んでいくだけの行為。

覚えていること。ミカゲさん。センセイ。沙織ママ。ヒデ兄。顔も、声も、どんな人だったかと思い出せるのに、その人との思い出はない。

食べる、寝る、多分、数学や歴史といった勉強したことも全て思い出せるのに、どこでどう習ったのかは思い出せない。

自己を証明するものは何もない、記憶。記録。もしくは、データ保持？

この身体は、実はアンドロイドだともいうつもりか？なんて中二病な。

「シュウ」

闇の中、一筋の光を灯すように、記憶にない、けれどはつきりとおぼえのある少女が目の前に立っていた。

「シュウ、ミカゲさんが呼んでる」

名を、呼ばれた瞬間、漣のように記憶が広がった。

その記憶に気を取られていると、腕を取られ、立ち上がらせられる。見た目のほっそりとした体型に似合わず、ずいぶん力強く引っ張られた。

「きみ、は？」

目深にかぶった野球帽と逆光で、口元しか見えない。その口元が、ゆるりと柔らかく弧を描く。

長い髪が水底にいるかのように揺らいで、広がる。それが翼のようだとぼんやりと思うと、背を押された。

慌てて振り返ってみれば、少女は手を振っていた。

弧を描いていた唇が、ゆっくりと言葉を紡ぐ。

「っあ！」

何か、叫ぼうとして、目が覚めた。

咽喉がひりついて、息を吸った瞬間に大きく噎せる。何とか落ち

着いて周囲を見れば、そこが養父であるセンセイの廃ビルだということを知った。

今眠っているパイプベッドと、石油ストーブしかない部屋。シンシユンと石油ストーブに置かれた薬缶が湯気を立てている。

静かにそれらを確認するかのように見渡してから、剥き出しのコンクリートに揃えられたスリッパを履いて、部屋のドアを開ける。

二つあるドアの内、迷いなく右手にあったドアを開けた。

その向こうはすっかり居住スペースで、先ほどいた部屋がまるで嘘のように物で溢れていた。

物といっても本の類が多く、何らかの専門書から、週刊誌の類までもが足の踏み場もないほどに散乱していた。

その本の山の中に鎮座しているソファーから、長い脚がはみ出しているのが見えて、頬を緩ませながらそろそろと近づく。

毛布に包まって穏やかに寝ているのは、思ったとおり、ミカゲさんだった。

寝こけている姿が可愛くて、小さく笑う。

「ああ、目が覚めたみたいだな」

本棚で死角になっていたPCの置かれたデスクから、不精ヒゲにメガネの男が顔を出した。

椅子から立ち上がり、キッチンスペースへとペタペタとスリッパを鳴らしながら歩くその人を目で追いながら、ああ、センセイだなと、目を細める。

そうして、あれと思う。記憶があるはずの僕は、それらすべてを照合するかのように現状を確認しようとしている。そうすることで、記録にすぎない記憶を自らの記憶にするかのように。

「ほら」

僕のマグカップ。白に英字が入ったそれには、甘い香りのココア。僕が好んで飲んでいたもので、舌に残るくらいの甘さが好きだった、それ。なのに、なぜか嫌悪感を覚えた。

受け取らないわけにもいかず、両手で受け取って、少しだけ口に

含む。

「…甘い」

記憶と生じる、ズレ。

口に広がる甘さに思わず顔を顰めたら、先生が驚いたような表情を浮かべていた。

「お前…誰だ？」

その問いに、特に疑問はなかった。

ただ、つい先ほど得られた答えを口にするだけなのだと、思ったから。

「僕…“僕”は、シュウ」

「シュウ…？」

その名を吟味するかのように、センセイが口の中で呟く。

何度か呟くうちに、難しい顔つきになって、ソファで眠るミカゲさんを蹴り起こした。

「つてえ！何すんだ、かぶらぎ蕪木！！」

飛び起きたミカゲさんの罵声も聞き流し、センセイは僕にソファに座るように言って、自分はテーブルに置かれた本をどけて、向かうようにその上に腰かけた。

「なんだ、一体」

寝起きで苛立っているのか、睨つけるようにミカゲさんがセンセイを見れば、センセイは僕を見た。それだけで、ミカゲさんは眉間にしわを作る。

声を上げようとするミカゲさんより早く、センセイが口を開いた。

「シュウ、だったな」

「はい」

確認を取られるまでもなく、僕はシュウだ。

なのに、目の前の人たちにとって、僕はシュウではないということとが、今更ながらに漠然と感じられた。

「シュウ…？」

ミカゲさんが訝しげに僕を見る。

「僕は…いえ、この身体は、“シュウ”では、ない、のですね？」
記憶と生じるズレは、何もココアだけではなかった。しっかりと
状況と記憶を見分してみれば、腰まである髪と、膨らんでいる胸、
そして、女物の服。

僕は、自分が女だということを、シュウであることを確認されて、よ
うやっとな認識したのだ。

「オレたちの記憶が正しければ、お前さんは蕪木秋^{かぶらぎあき}って名前のはず
なんだがな」

罷り間違っても、シュウなんて名前ではなかったと、そう突きつ
けられても、僕の中のアイデンティティが崩壊することはなかった。
名前によって確立したはずのそれなのに。

それは名前というものの以外に、僕のアイデンティティを形成する
に何かがあるということだ。

よく、わからないけれど。

「僕は、“シュウ”です。“シュウ”でなければなりません。蕪木
秋がこの身体の名前だというのなら、僕は蕪木秋として生きていく
のでしょう。ですが、僕は“シュウ”で、“シュウ”として生きる
ことを求められています」

つらつらと述べられる言葉に、僕自身、深く意味を理解していな
かった。ただ、何かに突き動かされるままに、口が動く。

「求められているって、誰に」

ミカゲさんが、茫然と言った。

問いかけですらなかったのかもしれないその問いに、僕は困惑し
た。

誰。誰だろう。誰に何かを求められたことも、シュウという自己
を確立してから、まだ一度もないはずだ。一度も。否。

「おん、なの…こ」

髪の長い、女の子。

目の前で、あの少女が立っているかのような錯覚…幻覚？
帽子をはずし、にっこりと笑って。

「蕪木、秋…？」

自分と同じ顔の少女。

「シュウ？」

センセイの声がどこか遠くで聞こえる。

それと同時に、目が覚める前の言葉を思い出した。

『生きるために、忘れていつて』

わかってる。だから、僕は君のことと忘れないといけないんだ。

0・始まりは緩やかに（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

亀以上に遅い更新かとは思われますが、どうぞよろしく。
誤字脱字ありましたら容赦なくお教えください。

1 - 1 日常に揺られて

ひっそりと、ため息をこぼす。

溶け込んでいるようで、全く溶け込めていない教室は、いつまでたっても苛立ちを誘発する場所に他ならない。

その苛立ちを胸の内に押し留めながらも、口には出さないというだけで、態度には丸出した。

それ故に、クラスメートから反感を買うことは自然の道理だ。が、表立って反感を示せば、後々損をするのは自分たちだということを、これまでの経験で知っている彼らは、わりあい大人しい。

それも、まあ…表立って、だが。

「ねえねえ、見て！これおいしそうじゃない？」

机に広げた雑誌を指差しながら、クラスの中ではそれなりに仲がよい部類に入るトモが、人懐っこい笑顔が問いかけてくる。

なかなかいい度胸をしているのかと思えば、これまた単なるバカでしかないこの子は、空気が読めているようで読めていない。

「そうだね。きっと美味だろうけど、今日は予定があるんだ」

「えー！付き合い悪いよお。せつかくテスト終わって、これからいっぱい遊べると思ったのに」

拗ねたように唇を尖らせて、ブーブーと文句を垂れる姿は、うん、可愛い。

「彼氏と行けばいいだろう？誰だったか…ああ、二組の松平だったか。彼を誘えばいいじゃないか」

「…あー、…うー、えーっと、ね」

どうやらまた別れたらしい。

あまりの尻軽さに、クラスメートでトモを相手する人間はいなくなつた。

変に間延びした喋り方は人を苛立たせ、誰にでも媚びるような態度が嫌悪感を抱かせてしまうトモに、近づく輩といえばチャラチャ

ラとした能無しだけだ。

学習能力のないトモは、少し優しくされるとコロツと騙される、いいカモなわけで。ここら一帯の地区では有名な話だ。

またかと呆れたように溜息を吐けば、珍しくトモが不満そうに声を上げた。

「いいんだもん、あんなやつ！今回はアタシから振ったんだからあ！」

「へえ。それはまた、どうして？」

松平がどうだったか知らないが、それなりに上手くいつていたはずだ。表面的には。

これなら、最長記録が更新されるかとも思っていたのに、何をやらかしたんだ松平と、理不尽に怒りを覚える。いつ別れるか賭けていたのだ、ミカゲさんと。

「だって、だってあいつ！…あーちゃんのことキチガイって！！」

そう言ったんだものと、えぐえぐと泣き出したトモに、思わず呆気にとられた。

ちなみに、あーちゃんとは言わずもがな、僕のことだ。あまり嬉しくないそのあだ名に辟易としているが、トモはそんなこと気付いていないので、出会ってからずっとそう呼び続けている。

「そんなことで…」

「そんなことじゃないよ！あーちゃんのこと、キチガイなんて！！あんなやつ死んじゃえばいいんだあ！！」

相当憤慨している様子のトモに、乾いた笑みを漏らしながら、その頭を撫でて何とか宥める。

「わかった。わかったよ、…しょうがないな。友達思いのトモに、ご褒美をあげよう」

涙で濡れた目をパチパチと瞬かせ、ぼけつと見上げてくるその姿は、なんというか、小動物に近い。だからこそ、可愛いと思えるのだけ。

「この店、来週なら付き合ってあげるから、泣きやみなさい」

雑誌を指し示しながらの言葉に満面の笑みで頷くトモは、そこらの女より断然可愛くて、声をかけてくる男が途切れないことを納得した。

駅前に立ち並ぶビルの中。路地裏の奥にひっそりと佇むレンガ造りの建物を知る人は少ない。古くからあるのか、外壁のほとんどが蔦で覆われている。四方をビルで囲まれ、採光が一切望めないためか、少し薄気味悪さもある。

立ち並ぶビルで世界が切り取られたかのような空間から見上げる空は、鈍色の雲に覆われ、四角かった。濁った空の色を見上げて、深く息を吸うと、ひんやりとした空気が肺に染みた。

「こんにちは」

「いらつしゃい」

ドアを開けると、カラントとドアベルが鳴って、穏やかな雰囲気の中老のマスターが出迎えてくれる。アンティーク調の落ち着いた店内とよく似合っていて、僕は頬を緩ませた。

香り高いコーヒーの匂いが鼻腔をくすぐり、どこかほっとする。

「珍しい。まだ上、ですか？」

ここで待ち合わせするときは、カウンターでコーヒーを飲んでいることが常の人が見当たらない。仕事場に僕を入れることを執拗に避けている感じがあつたら、本当に珍しいとしか言いようがなかった。

「今日は一回も降りてこないからね」

一回も、という言葉に驚きを隠せなかった。コーヒー中毒といっても差し支えないあの人が、コーヒーを取りにも来ていないなんて！仕事で何かあつたのだろうかと心配になりながら、コートを脱いでドアの脇にあるコートハンガーに掛ける。

「ちよつと様子見てきますね」

倒れているんじゃないかと心配になりながら、マスターに声をか

けてカウンターの奥にある木製の階段を上っていく。

三階建てのこの建物は、一階がカフェ、三階がミカゲさんのオフィスになっている。

二階は…。

何かが叩きつけられるような、歪で大きい音が聞こえてきて、二階の踊り場で身体を強張らせた。少し空いたドアの隙間から、叫びと罵声と、暴力の音が入り乱れて聞こえてくる。

恐怖に足を取られたかのように動けないでいると、ドアが開いた。出てきたのは見知った顔だった。

「…アヤコさん」

「あら、シュウ。なにしてんの、そんなところで。って、あー…聞こえてた？」

アヤコさん。ミカゲさんの冗談交じりの話では、どこかの情婦、もしくは姐さんをしているとか。真実がいかほどかは知らないけれど。

ダークスーツを着たアヤコさんは、銜えていた煙草に火をつけて、綺麗な茶髪の髪を揺らしながら顔をのぞいてきた。

程よく化粧の施された綺麗な顔が間近に来て、ふわりとした華やかな、それでいてきつくはない香水の匂いが香る。

「顔色蒼いけど、大丈夫？」

「はい」

しっかりと答えれば、ならいいと少し乱暴に頭を撫ぜられる。そうしてやっと、身体から緊張が抜けた。

「こんなとこないで上行きな。ここで立ち尽くしていると、シュウのこと知らないバカが絡んでこないとも限らないから」

彼女の背後の部屋では、今でも暴力が渦巻いているだろうに、それとは切り離されたような優しさを感じて、素直に頷く。

やっぱり、僕にとってアヤコさんは、優しく頼りになるお姉さんでしかなかった。

「何してんだ」

ギツと軋む音共に、低いテノールの声が聞こえて振り返った。

「ミカゲさん」

黒のロングコートを片手に階段を下りてくるその人に、思わず笑いかけた。

小走りで駆けよれば、ぐしゃぐしゃだと笑われながら髪を直される。先ほど撫ぜられた時に乱れたのだろう。

ついつとアヤコさんの背後の部屋へと視線を向けて、ミカゲさんはクツと肩を窄めた。

「またか。最近多くないか？」

「どうにも、また影が動き出したらしい。こっちはいい迷惑だわ、ホント」

「けど手間が省けただろう？あと数年は出てこないと思ってたのに」
「突然消えたからね。まさかこんな短期間で戻ってくとは思わなかったけど。一体どこの誰なのやら。：見つけたら殺すだけじゃ済まないわ」

よくわからない内容の話に、口を開くこともなく、ぼんやりと聞き流す。

「警察も動き出したって話だ。頭の弱いあの連中は、影を俺に仕立てあげる気らしい」

「やだっ。なにそれ。そりゃ、ミーはこっち側に足突っ込んではいけど、それはクラッカーとしてでしょう。それだって、私からの依頼しか受けてないじゃない。その依頼も、まさか警察に嗅ぎつけられるような代物じゃないわよ」

「素姓の一切を隠してて、よくて年齢と性別しかわからない人間だからな。疑うにはもってこいだろう」

「そういう問題じゃないわよ。あーもー。ミーが警察に疑われてるってことは、シュウまで目つけられてもおかしくないじゃないの！」
「僕が、どうかしたんですか？」

自分の名前に反応すれば、アヤコさんは勢いを殺がれたように、煙草のフィルター部分を強く噛みつぶした。

「とりあえず、警察が接触して来たら連絡して。こっちでも何らかの手は打つから」

「余計なことはしなくていい。どうせ探りいれられたって何も出てこないようになってる。あの偽造された戸籍にだって、辿り着くか定かじゃないんだ。高みの見物しとけばいい」

嘲う物言いに、その徹底ぶりが如何なるものかを思い出した僕も、あれはな…と遠い目をする。

アヤコさんも若干口元を引き攣らせ、煙を吐いて頭を振った。

「念には念よ。どこからどう洩れるかなんてわかったもんじゃないんだから。とりあえず、絶対に連絡はしなさい」

それに返事をしないまま、ミカゲさんは僕の肩を抱いて階段へと足をかける。結局僕は、会話の内容を理解することもなく、ミカゲさんについて歩くしかなかった。

マスターへの挨拶もおざなりに、ミカゲさんは僕のコートを取って店を出る。肌を刺すような寒さだったが、折角のコートも着用することなく、ミカゲさんは黙々と歩いた。

路地裏を出ると、煩わしいほどの喧騒に吞まれる。肩から腕へと移ったミカゲさんの手に誘導されるままに歩いていると、近くの有料駐車場に停めてあった車へと行きついた。

黒のセダンのそれに、あれと思った。

「ミカゲさん、また車買いました？」

「オーブンカーは嫌だつて言ったのシユウだろ」

言った。言ったが、冬場にオーブンカー、しかもこれでもかっていう赤は嫌ですと、冷めた口調で言ったただけだ。

「お金、もったいないですよ」

助手席に乗り込みながら、思ったことを口にしたただけなのに、ミカゲさんが微妙な顔つきになった。

「お前、よくあの家にいてそんな貧乏性になったな」

「貧乏性ってなんですか。事実を言ったままでしょう。ミカゲさんやセンセイがおかしいんです。お金の使い方荒すぎますよ。これの

他に紺のBMWがあつたでしょう」

「貯め込んだって屑にしかない紙束をさつさと使い込んで何が悪い。出たって入るところから入ってくるんだ。使わないだけ損だろうが」

胸を張られていいことなのか、よくわからない。

けれども、正論…なのだろうか。これは。

「………全国の一般市民を敵に回した気がします」

「知るか。頭が悪いだけだろう。最低限の小回りで、大金稼いでるだけだ」

ヤバイことにもちよつと手を出してはいるけど、確かにそうなのだろう。怠惰ではあるが、それなりの努力の結果といえればそれまでだ。先物に手を出すことなく、一般的に誇れるような収入だけでも結構な額だということも知っている。

ようは頭の使いようということか。

「オレとしては、お前がどうしてそう貧乏性になったのかが不思議だ」

「ですから、貧乏性とは違うでしょう。堅実的と言ってください」
「堅実的…ねえ。とりあえず一生困らない金がお前のもとにあるっていうのに、使うのを渋ってる限りは堅実じゃなくて小心だわな」
これは何をどう反論しても無駄だろうと、景色の流れる窓の外へとそっぽを向いた。

それにミカゲさんはくつくつと咽喉を震わせ、悪い悪いと、全然悪く思っていないだろうに頭を撫でられる。

「………それで、どこ行くんですか」

話題をすりかえることで、手をどけさせる。撫でられることは嫌いじゃないけれど、こういうのは面映ゆい。

「今年の冬物まだだっただろ」

「………車から飛び降りてもいいですか」

行きたくない。何が何でも行きたくない。たとえ死んだって行きたくない。そう全身で拒否を表明すれば、諦めろと目で言われた。

「お前の趣向に合うようにしてあるから、逃げるんじゃない」

最大限の譲歩なのだろうが、こちらとしては最小限の譲歩だ。着せ替え人形になるのも楽ではないのだと、泣き叫びたくなる。

「週末だつて聞いたはずですけど」

逃げる算段もしていただけに、恨みがましく思いながら、最後の抵抗とばかりに睨めつけられ、苦味潰したような顔をされた。

「蕪木が学会入ってるんだよ」

医大やめたつていうのに、こういうのにお声が掛かってくるあたり蕪木も大概だよなあと思ひながら、ミカゲさんはハンドルを切った。あ、ハンドル捌きが無駄にかつこいのかと思ったのは無しにしよう。

「…行かないって」

「興味ある研究が発表されるんだと」

なるほど。それで予定が早まったわけか。予定は未定なセンセイのやりそうなことだ。

それに振り回されるのも慣れたからどうとも思わないが、これから待ち構えていることを思うと、頭を抱えなくなった。

1 - 1 日常に揺られて（後書き）

この後どころ視点が変わります。
読みづらかったらすみません…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2477p/>

夕闇の中　生きながらえる

2010年12月2日09時40分発行